

駿建 2015 Jul. vol.43 No.2

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College



Special Feature

学部卒業から1年後・10年後

卒業生たちの今

Special Feature

学部卒業から1年後・10年後

卒業生たちの今

前号（2015年4月号）の特集「先生が答えます。学生のリアルな悩み25」で、悩みとして多く届けられたことのひとつが「就職」についてでした。建築を学ぶと実にさまざまな職種に就くことができますが、不安を持つのは、誰もが同じだと思います。

それでは、先輩たちは学生だった当時、どのような不安を抱え、どのように立ち向かい、就職していったのでしょうか。また、その先輩たちは、今どのような状況にあり、学生時代の「就職」に対する不安に対して、今だからこそ何が言えるのでしょうか。

今回の特集では、8名の先輩たちに話を聞いてみました。次々ページから環境系、構造系、計画系、企画系の先輩たちが対になって登場します。左のページが就職して1年過ぎた先輩たち、右のページが就職して10年過ぎた先輩たちです。就職したばかりの先輩にとって、就職活動は昨日のことに思い出されるものかもしれませんが、10年を経験した先輩には、経験を重ねたからこそわかることがあるかもしれません。

就職とは、もしかすると生まれてはじめて、自分で「決断と行動」をすること、とも言えるのかもしれません。先輩たちの話を「決断と行動」という視点で、読み進めることをおすすめします。

year

学部2013年度卒



向井雄太

職種：設備現場管理
勤務先：三建設備工業



水越清文

職種：施工管理
勤務先：ゼネコン



飯名悠生

職種：建築設計
勤務先：フリーランス
・設計事務所



赤根広樹

職種：大学院生
所属：日本大学大学院

10 years

学部2003年度卒



貝瀬智昭

職種：研究開発、技術支援
勤務先：東急建設



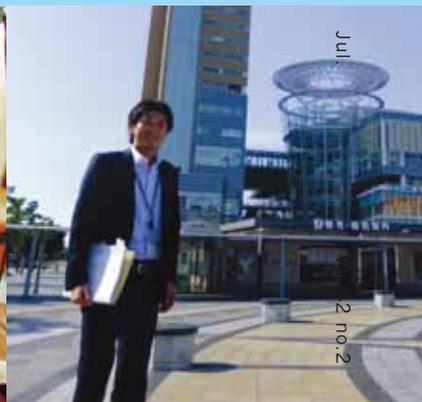
池田雄一郎

職種：建設業
勤務先：池田組



中林仁子

職種：建築設計
勤務先：4FA



立唐寛之

職種：都市開発
勤務先：大成建設から出向中

1年後・10年後 卒業生たちの今



向井雄太
(むかい・ゆうた)

学部卒:2013年度
研究室:蜂巢研究室
現在の職種:設備現場管理
現在の勤務先:三建設備工業
現在の役職:係員

“ 学生時代は、とにかく遊んで、
社会に出てからも、愚痴を言い
合えるような友達を見つけよ
う。”

父 が塗装屋を経営していたのがきっかけで建築業界に興味を持ち、建築学科に入りました。4年生になると、実験動物施設など、特殊な研究をしていることに関心を持ったことがきっかけで、蜂巢先生の研究室に入りました。

一方で、大学で建築を学んでいくうちに、自分たちが快適に暮らしていくために必要不可欠な衛生、空調などに携わる仕事がしたいと考えるようになっていきました。就職する前は、社会に出てちゃんと仕事ができるのかがとても不安でしたが、そんなと

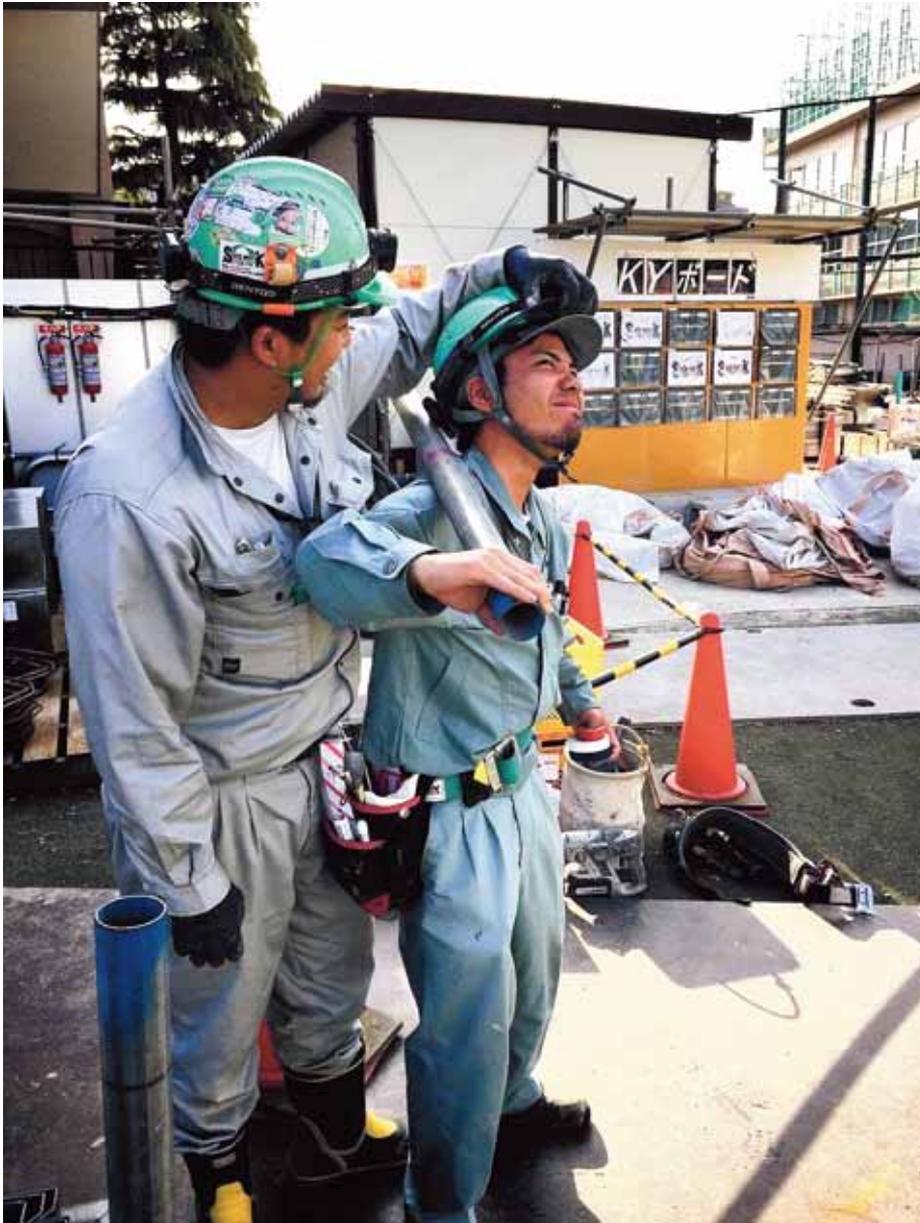
きは、とりあえず部活に打ち込むことで不安を紛らせていました。やがて就職活動を通して、現在働く設備施工会社の社風に惹かれ、受けたところ、採用していただくことができました。

今は現場監督をしています。休みが日曜しかなかったり、何日間か泊まり込むこともあります。プライベートの時間が少なくなりますが、現場の職人さんたちと仕事の合間に他愛のない話をしたり、仕事終わりにビールを飲むことが、毎日の生きがいになっています。

あと4、5年経つと、小さな現場の所長を任されることとなります。それまでにいろいろな現場を経験して、現場がスムーズに進む段取りが、きちんとできるようになりたい。仕事を早く終わらせて、なるべく家に帰れるようがんばりたいと思っています。

学生の皆さんには、貴重な学生時代の時間を、とにかく遊んで楽しい思い出をいっぱい残してほしいと思います。社会に出てからも酒を飲んで仕事の愚痴を言い合えるような友達を見つけるといいと思います。 駿

現場で撮った写真。こんな感じで職人さんと楽しくやっている。



海外研修旅行にて。海外のいろいろな建物を見ることができた。

1年後・10年後 卒業生たちの今

10

YEARS LATER

貝瀬智昭
(かいせ・ともあき)

学部卒:2003年度
大学院修了:2005年度
研究室:井上研究室
現在の職種:研究開発および技術支援
現在の勤務先:東急建設

“社会人になってから、大学生のときは時間がたくさんあったと、気付く。だからこそ、日々、探究心とチャレンジ精神を持って!”

建 築音響に興味を持ったのは、2年生のとき、井上先生が担当されていた環境工学の授業がきっかけでした。3年生になると井上研究室のゼミナールを受講して、小学校の音環境に関する研究テーマの班に参加しました。そこで、小学校は発達段階にある児童の学習の場であることや、1日の大半を過ごす生活の場だからこそ、音環境としてとても重要な空間であることを学びました。そして井上研に入り、当時問題とされていたオープンプラン型教室の音環境の改善方法について研究したいと思ったのです。

それよりも以前、1、2年生のときは、設計の授業で優秀な人たちが課題に取り組む姿勢や、その成果物にとても驚く一方で、自分のセンスの無さに落ち込み、建築学科を選択したことが間違っていたのではないかと思うこともありました。建築学科に入ってくる学生は、大半が「意匠設計の仕事に就ければいいな」と思っているでしょう。自分もそうでした。そして、この挫折によって、大きな不安を持つことになりました。

しかし、建築学科で専門的な授業を受け続けていくうちに、「建築=設計」ではなく、建築は、設計・構造・設備・環境など、あらゆる分野が総合して成立していることに気づき、不安がなくなりました。それから、建築にはたくさんの分野があるのだから、そのなかから自分の興味があること、学んでいて楽しい分野を、積極的に勉強しようと思うようになりました。

就職は、建築音響に関連した職、防音材料を扱う建材メーカーへの就職を希望していました。偶然、研究室から、現職の採用枠があるので受けてみないかとのお話をいただきました。面接を受ける前に技術研究所



海外研修旅行に行ったときに、ドイツの寿司屋で大将と一緒に撮った写真。

を見学させてもらい、その音響実験施設が充実していることに驚きました。特に音響縮尺模型実験(「オーチャードホール」と「みなとみらいホール」)のシステムには、それまで文献や授業での情報しかなかったので、とても感動しました。ぜひ、ここで働きたいと決意したことを今でも覚えています。

現在は、ゼネコンの技術研究所で、研究開発のテーマリーダーをしており、建設現場で発生する騒音・振動を低減させる技術を開発しています。建設現場では、重機の騒音や振動がつきもので、近隣の方々に迷惑をかけることがあるので、このことは建設現場周囲の音環境改善のためにも、ゼネコンとして必要不可欠な技術開発です。テーマリーダーは、自らこれが必要だと思う研究開発テーマをあげ、最後まで責任を持って成果を出すことが求められます。失敗を

現在の貝瀬さん。あるホールの舞台にて騒音測定を行う。



繰り返してやる気を無くすこともありますが、成果が出たときの喜びはとても大きく、やりがいがあります。それ以外にも、音響施設(ホールなど)の音響設計や現場で建築音響に関する問題が生じた場合の技術支援業務も行っています。

将来は、コンサートホールのような大型音響施設プロジェクトの音響検討を担当して、私の入社を決意させた音響縮尺模型を使った実験の検討に携わりたいですね。現在では、コンピュータシミュレーションの発展やコストの面から、模型実験の機会は少なくなってきていますが、当社に在籍しているうちに最も行いたい業務です。

社会人になって10年が経ちました。思うことは、探究心とチャレンジ精神を持つことの重要性です。社会に出てからのほうが、学生時代よりも、あれもこれもやってみたい、もっと知識を得たいと思うことがたくさんあります。しかし、日ごろの業務に追われ、断念していることがほとんどです。大学生には自由な時間がたくさんあります。何でも良いと思うので、自分の興味があることに対して、是非、探究心とチャレンジ精神を持って、日々を過ごしてください。学生の頃、もっと〇〇しておけば良かったと後悔することのないように! **駿**

1年後・10年後 卒業生たちの今



水越清文
(みずこし・きよふみ)

学部卒:2013年度
研究室:材料施工研究室(中田研究室)
現在の職種:施工管理
現在の勤務先:ゼネコン
現在の役職:係員

“最初から就きたい仕事は明確になくたっていい。インターンシップ、OB訪問など、自ら起こす行動が大事。”

大学に入り、建築を学んでゆくなかで、当初興味のあった意匠やデザインだけでなく、建物を構成する要素である構造体、さらにはその部材や材料について興味が湧いていきました。材料のなかでも、実施工において数量が一番多いコンクリートは、最も重要な管理項目のひとつであり、養生方法などによって強度発現に違いが生まれるという特徴があるため、実際にコンクリートに触れてみたいと思い、材料施工研究室に入りました。

3年生のときのコース分けでは、環境・構造コースを選びましたが、そのころは、同級生たちが就職活動をはじめようとしているのを横目に、私は漠然と施工管理の職に就きたいと考えていました。しかし、建築施工は、座学で少し学んだだけで、実際の現場でどのような仕事をするのか、大学で学んだことがどこまで活かせるのか、具体的なイメージができずに不安でした。

最初は、就職活動が上手くいかず、内定が出ないまま、研究室に所属する時期となりました。研究室に所属してからは、実際にコンクリートに触れていくなかで施工を身近に感じる事ができ、さらに実際に建築

施工に関わってきた先生や卒業生の話聞き、施工管理についてのイメージがより現実的なものとなりました。研究では実験の計画を自分で立てて、材料やコンクリートを発注し、まとめるという作業を行いました。このことは今の施工管理職にも活かされています。



卒業研究の実験で、アンカーボルトの引き抜き試験を行っているところ。試験体のコンクリートの作製から実験まで、全て自分たちで取り組んだ。

その後、4年生の秋に内定をいただき、ゼネコンの施工管理に就職しました。現在は、鉄筋コンクリート造のマンションの建設現場で、所長のもと、品質・価格・工程・安全・

環境管理の仕事をしています。具体的には、躯体が図面通りできているかを確認、記録し、職人さんたちが、安全に工程通り仕事を進められるよう、段取りをすることが仕事です。

1年目に任せられたことのひとつに生コン関係があります。コンクリートの打設日が決まっています。コンクリート数量の拾いから、当日にコンクリートが打ち込めるよう、道具から職人さんの手配までを自分ひとりでやります。図面上で拾った量と、現場でのコンクリート量は誤差が生じることがあるので、コンクリートを打設管理しながら、追加しなければならないことも多々あります。反対に、生コンの数量が、自分が拾った量とぴったりのときは嬉しいですね。

10年後は所長になっていきたいですね。所長とは、工事現場の1番の責任者です。今、私が行っているような仕事の、さらに全体をとりまとめる大きな役割を果たします。その分、責任は重いですが、その上で計画をもとに工事が進み、最終的に建物の形が見えてきたときには、この上ないやりがいを感じられると思います。

私は、4年生になるまでは、就きたい仕事は明確ではありませんでした。しかし、当時は、特に行動を起こすでもなく、ただ単に就職(活動)に対する不安だけが大きくなっていました。今になって思うことは、自ら行動を起こすことが必要だったと思います。たとえば、夏休み中に各企業が行っているインターンシップに参加したり、先生方や卒業生から話を聞いて、より具体的に就職のイメージをつけることが必要だと思っています。 ■

現在の水越さん。鉄筋コンクリート造のマンションの建設現場にて。



1年後・10年後 卒業生たちの今



池田雄一郎
(いけだ・ゆういちろう)

学部卒:2003年度
研究室:空間構造デザイン研究室
現在の職種:建設業
現在の勤務先:池田組
現在の役職:専務取締役

“就職に結婚、さまざまな経験から、本当に「やりたいこと」が見えてくる。だから、やってみようかと思うことに一步踏み出そう。”

当時の研究室のテーマのひとつに「Less is more」という建築家ミース・ファン・デル・ローエ氏の言葉が掲げられていました。「最小限で最大限の力を」、そして、「デザインも美しく」。デザイン・構造・省エネに関してトータルに勉強したいと考えていた私には、とても魅力的なテーマでした。また、「習志野ドーム」や「Student Summer Seminar」といった、自分たちで設計したものを、自分たちの手で、力を合わせてつくり上げていくという活動がたまたま魅力的でした。もちろん、決断するまではいろいろと悩みましたが、空間構造デザイン研究室を選びました。



空間構造デザイン研究室の「Student Summer Seminar」で、研究室のみんなで建てた「虹のシザーズ」。

私は、最終的に新潟県で建設業を営む実家を継がなければならないということがありました。最終的なゴールが決まっているので、「それに合った道筋を辿ることが大事」という考えがある一方で、「もうしばらくは自由にしたい」という想いがあって、3年生の就活の時期は、気持ちがうまく整理できず、とても中途半端な状態が続いていました。

当時、周りの多くの学生は、首都圏が全国展開しているような大手企業に就職を希望していました。私は、考えていくうちに、最後は実家に戻るのだから、首都圏ではなく地元の新潟で就職したいという思いが芽生えてきました。しかし、地方に就職する人が周りにあまりいないこと、大学の仲間

と距離的に離れてしまうということに不安を感じていました。

同期の友達、先輩や岡田教授に相談しました。とにかく、聞いてもらうだけでも不安は和らぎました。友達や先輩からは、励ましやアドバイス、元気もいっぱいもらって、本当にありがたかったです。岡田教授からは「今これで人生が“決まる”と決めつけなくても大丈夫だよ」といったようなアドバイスをいただきました。悩みながらの道だけれど、いつでも修正ができるかなと思い、一步を踏み出すことができました。

その後、悩んでいるときに声を掛けていただいた地元の組織設計事務所に就職しました。新潟県では珍しい意匠・構造・設備、それぞれの設計者が揃った会社で、設計業務をトータルに携われることを魅力的に感じて就職しました。そして、その会社で修行した後、実家の会社へ入社しました。今は、その会社で、専務取締役をしています。会社は主に建築分野の仕事をしていて、学校や文化施設といった公共建築、店舗や工場などの一般建築の建設、住宅の新築やリフォームまでさまざまです。営業・設計・見積もり・現場と、いろんな業務を担当するのですが、役職が変わったことで、まとめ役に回ることが増えてきました。会社をどのように運営していくかという舵取りが、新しいやりがいになってきています。

この仕事のやりがいは何と言っても、引き渡したお客さんに喜んでもらったり、建てた建物が地域の皆さんに役立っていると実感したりすることができることだと思います。自分で取り組んだ建物が身近に建っていくことは、地元で仕事をする事の良さだと思います。

2050年へ向けて日本の人口は減少していきななかで、地方の人口は今の半分になるという予測もされています。この問題にどう取り組むかは、地方にとっては大きな課題です。また、エネルギー問題も避けては通れない問題となってきています。未来を生きる子供たちのためにも、さまざまな問題に対して、建築分野の観点から地域貢献できるような企業をつかっていきたいと考えています。

大学を卒業するとき、私には正直「明確にやりたいこと」なんてありませんでした。地方で暮らしてみても、設計業務から現場管理まで、さまざまな業務を経験して、結婚して子供ができて、地域の未来を考えるようになって……。そんな過程のなかから、今やっと「やりたいこと」が見えてきた気がします。明確では無いけど、やってみようかなと思うことに一步踏み出してみると、次の一步が見えてくるかもしれません。最初の一步とは違う方向へ進むことになったとしても、そのときの経験はきっと役に立つと思います。

先日オープンした自社モデルハウスにて。



1年後・10年後 卒業生たちの今



飯名 悠生
(いいな・ゆうき)

学部卒:2013年度
研究室:古澤研究室
現在の職種:建築設計
現在の勤務先:フリーランス、設計事務所

“大学生は暇です。時間がたくさんあります。だからこそ、興味があることを何でも行動してみてください。”

大学時代、課題などで意匠よりも計画に重きを置いて設計をしていました。そのため、まずは計画系研究室に進むことを考えていました。さまざまな研究室があるなかで、ふたつの研究室のどちらかで迷っていました。作家論や建築論、現代社会の建築計画に関して研究するなら古澤研究室、建築のハードな部分からは少し離れて、アートやまちづくりの計画の研究をするのであれば佐藤慎也研究室。最後の最後まで悩んで、それぞれの先生にも相談して、最終的に古澤研究室に決めました。



大学2年生のとき、学内の友人4人でチームをつくりコンペに参加した。上は当時「駿建」に取り上げられたもの。下は、現地にてクライアントとの写真。

意匠設計を選んだのは、2年生のときに、海の家の実施コンペで1等になり、設計・計画・監理に携われたことがきっかけでした。そのとき、意匠設計や納まり、構造を考えることが新鮮で、さらに実施設計に関わりたと思うようになりました。やがて知り合いなど、まわりの人に話していたら、他のプロジェクトを仕事としていただくことができ、それらも動かせるようになりました。

そんな経験も影響して、就職活動は一切考えていませんでした。変な自信だけがありました。3年生のころから、卒業後はすぐに独立したいと思うようになっていて、そのためにはどうするべきかを考えはじめたのです。就職活動をはじめの友達がいるなか、卒業後に仕事をしていくために、いろんな場所に顔を出したり、できることは何でもやりました。そのころ、一番不安だったのは、収入のことで資格のことでした。このことは、どうしたら良いのかわからず、卒業するまで解決することなく、大きな悩みそのままでした。

その悩みについては、所属した研究室の古澤先生によく相談しました。先生のおかげで自信をつけることはできたのですが、それでも不安そのものは消えることはありませんでした。卒業後、設計していけるように、クライアントになりそうな人や企業を地道に探していました。しかし、そのときに仕事や報酬を確定できたとしても、それがいつまで続くものかわかりません。その不安は今でもあります。卒業し、独立した今、私はなんとか生きています(笑)。好きなことをやっていたら、不安はいくらあっても何とかなる。卒業して社会へ出て1年が経ち、そう思うようになりました。

卒業後は、どこにも所属せず、フリーランスで働いており、今はある設計事務所でも設計担当をしつつ、自分自身の活動もできるようにしています。最初は、設計事務所に入るつもりはなかったのですが、この年齢で、大きな現場の意匠担当ができるということで飛び込みました。しかし、その仕事にどっぷりはまるだけではなく、自分の考えを形にする機会を持って、意匠より計画ができるようになりたいので、まだまだ勉強の気持ちで働いています。

10年後は34歳。結婚して、子供もいてほしい。それまでにはしっかり独立して、しっかり仕事をしていきたいと思います。それを目指して、ひとりの建築家として、まだまだ学びたい気持ちもあるし、実験的なプロジェクトも数多くこなしていきたいと考えています。

学生の皆さんは、やりたいことが明確に見つからない人がほとんどだろうと思います。まずは、とにかくどんどん首を突っ込むことが大事だと思います。大学生は本当に暇です。時間がたくさんあります。だからこそ、講演会に行く、展覧会に行く、本を読む……。興味があることなら何でも行動してみてください。今、僕が学生時代に戻れるなら、可能な限りそうすると思います。 ■

現在、進行中のプロジェクトにて、自らペンキを塗っている飯名さん。



1年後・10年後 卒業生たちの今

10

YEARS LATER

中林仁子
(なかばやし・のりこ)

学部卒:2003年度
大学院修了:2005年度
研究室:今村研究室
現在の職種:建築設計
現在の勤務先:4FA
現在の役職:共同主宰

“興味があることを並べていって、順番に手をかけてみる。そうすれば、自分にとっての広い伸び代が見つかるはず。”

建 築だけでなく多岐にわたるデザインについて興味があったので、他の意匠系研究室とくらべて、「建物を建てる」こと以外の接点が多かった今村研究室を希望しました。特に“施主と設計者”という関係性だけでなく、その場所を使う人とも意見交換を重ね、つくり上げていくことが建築の空間の強さにもつながると、先生の作品を通して強く感じていました。

学部時代は、1年しか研究室に在籍できないのですが、もっと研究室での活動を体験するため、大学院へ進学しました。建築を中心に、プロダクト、グラフィック、ファッション、とデザインにまつわるいろいろなことに興味を持っていたので、建築の設計だけにとらわれない働き方はどのようなものかということに常に考えていました。同時に将来は、個人として働きたかったので、一般的な就職活動はしませんでした。もちろん、どうやって収入を得ていくのかという不安はありました。



横浜でのアートイベントに研究室で参加しました時の写真。首都大学小泉研究室との協同だった。右から二人目が中林さん。

そこで、大学院の頃から、就職先を探すことよりも自分の理想に近い働き方をしている人と話をしたり、オープンデスクなどに行き、近い距離で観察することを心がけました。研究室の活動だけでなく、他大学の友人と一緒にコンペを出したり、建築イベントの企画もしました。出会った仲間たちに、同じ志を持つ人が多かったことが大き

な励みに、やがて卒業後はどうにかなるだろう、と楽観的に考えられるようになっていました。

大学院を修了後、わたしはふたつの職場を経験しました。

はじめは、神奈川大学建築学科の曾我部昌史さんの研究室のアシスタントスタッフでした。学生と共に、建築設計やアートトリエンナーレへ参加したり、商店街再生をテーマにした研究を書籍にまとめることもしました。どれも3次元の空間に留まらない表現を模索する、やりがいのあるものでしたが、やがて実務設計の訓練を受けなければという意識が強くなり、2年間を区切りに退職しました。その後、一級建築士の資格を取り、建築家・小泉雅生さんの設計事務所に就職しました。しかし、当時は建設業が落ち込んでいる時期。希望の設計職には就けず、プレスを中心にした役職に就きました。建築にまつわるさまざまなアウトプットの側面を知り、大きな経験となりましたが、建築をつくる実践の場で自ら手を動かしたいと強く感じ、2年を経て退職しました。ふたつの職場はどちらも、携わる人の多さや利害関係にとどまらない関係性が、空間や場をつくっていく上で重要であることを教えてくれました。

その後、学生時代から出入りをしてきたメジロスタジオに机を借りながら、友人の店舗の内装設計を受けました。実務設計は、同事務所にサポートいただきました。そしてちょうど同じころ、設計事務所に勤めながら、独立を視野に入れはじめていた今村研究室同期の江泉光哲と投合し、一緒に「4FA」という設計事務所を立ち上げました。学生時代に切磋琢磨した仲間と集結して、新たな活動がはじまったというわけです。

独立してからは、住宅や集合住宅、コミュニティカフェや動物保護活動のための施設など、さまざまな建築を手がけています。どの建築も、周囲との関係性をどのようにデザインするかということを心がけて設計をしています。

もちろん、仕事には常に大変なことがつきまといますが、一方で常にやりがいも感じています。特に設計者が目指すこととクライアントが目指すことが合致して並走できたとき、大きな達成感を感じます。これからも建築を軸としながら、コミュニティを構築する場づくりに携わり続けたいと考えています。

学生時代から「明確なやりたいこと」なんて、私も言葉にできませんでしたが、興味のあることを並べていって、順番に手をかけてみる。そうすると、自分にとって広い伸び代を持つものに気付けるはずです。そのなかから直感で信じ選んだことは、浅くても継続していくことが大切。そうすれば、新しい働き方も発見できると思います。■



横浜でリノベーションした「宿るや商店」にて。地域のコミュニティを集積し、次世代に継承していくカフェに携われたことは、大きな経験となった。

1年後・10年後 卒業生たちの今



赤根広樹
(あかね・ひろき)

学部卒:2013年度
研究室:都市計画研究室
現在の職種:大学院生
所属:日本大学大学院

“課題、サークル、アルバイト、遊び、何でもいいから一生懸命取り組みれば、そこからやりたいことが見つかる。”

まちに影響を与えるまちづくりこそが、私のしたいことだ！ あるときからそう思うようになりました。図面を描いたり、現場を指揮するのではなく、もっと川上の部分にある計画段階に関わって、そのまちや場所が何を求めているかを考えて、開発を行ってみたい。そのとき、そこに住まう人や働く人の声をくみ取ることができれば、たくさんの人を笑顔にできるのではないかと。そういう想いで、都市計画研究室を選びました。

まちづくりができる企業に入ろうと決心した3年生のころから、「行きたい企業に入って、やりたい仕事をするができるのか？」という不安がありました。大学院生である今も、同じような気持ちが続いています。将来のことを考えれば考えるほど、就職活動の重要性を感じるようになり、中途半端な覚悟で取り組むと、後悔するのは、とさらに不安が増します。もし間違えば、本当にやりたい仕事ができなくなるのではないかと。今、まさに就職活動がまったんだなかの自分にとって、不安はピークなのかもしれません。

実は私は、プロゴルファーを目指していました。そのためにゴルフの名門である日本大学に進学し、ゴルフ中心の厳しい日々を

今はM2。毎日、研究室で自分の研究を行っている。



送っていました。しかし、3年生のときに腰を痛め、その夢を諦めました。そのときになってはじめて、自分はどんな仕事に就きたいのか、と真剣に考えました。そのときに、まちづくりに携わることができるデベロッパーという職を知るのですが、日大の学部卒では就職者がほとんどいないことがわかり、大学院に進学し、まちづくりについて深く学び、新たに就職活動に望もうと思ったのです。



ゴルフ場で、ゴルフ漬けの生活をしていた2年生のころ。

今は就職活動を行いながら、アウトレットモールを対象にした修士研究を行っています。たとえば佐野市では、アウトレットモールを誘致して新都市を形成し、地域活性化につながった事例があります。アウトレットモールの開場が、地域に与える影響を分析し、その波及効果をより明確にすることで、地域活性化の力になるような研究を行いたいと考えています。

でも、就職活動と修士研究の両立はとても大変です。今年からは就職活動の時期が変わり、選考開始が8月になったことで、修士研究一本に集中できる時期が遅くなりました。けれども、これは逆にチャンスだ、とも思いました。この状況はみんな同じです。自分がしっかりと準備ができれば、抜きん出ることできる。就職活動の変化の年だからこそ、その差が如実に表れると考え、そこにやりがいを感じています。

将来は、一緒に何かをする仲間を大切にすること、チームを組んで計画、開発した大規模施設で、利用する人たちを笑顔にする仕事を成し遂げることをふたつ大切にしていきたいと考えています。人はひとりではすることも限られていますが、仲間とともに切磋琢磨することで、できあがるものの質を高め、また自分の成長にもつながります。そして、誰かを笑顔にしたときこそが、自分の達成感を感じられるときだからです。いつか仕事で、このふたつを満たすことができることを目標にしています。

後輩の皆さんは、もし、やりたいことが見つからなくても、のんびり生活するのではなく、まず目の前のことに一生懸命取り組むことをすすめます。それは大学の課題でも、アルバイト、サークル、遊び、何でもいいと思います。どんなことでも一生懸命取り組みれば、そこからやりたいことが見つかるかもしれませんし、何よりも自分が成長できるからです。少しでも何かが見つかれば、将来をイメージして準備をする。将来のイメージが、お金持ちになりたい、モテたい、だとしても、それは立派な目標になると思います。自分の本音と向き合い、目標を定め、後は努力する。これに尽きると思います。

■

1年後・10年後 卒業生たちの今



立唐寛之
(たつとう・ひろゆき)

学部卒:2003年度
大学院修了:2005年度
研究室:都市計画研究室
現在の職種:都市開発
現在の勤務先:大成建設から
シンボルタワー開発へ出向中
現在の役職:係長

“違ふと思ったら、途中で軌道修正すればいい。まずは、わくわくして夢中になれるようなことを考えて行動してください。”

福 岡山出身の私は、中学、高校生のころ、「アクロス福岡」や「キャナルシティ博多」などの大規模複合施設が次々と完成し、福岡のまちがダイナミックに変貌していくのを目の当たりにして、建築が持つ影響力の大きさを感じ、建築学科へ進むことを決めました。その後、学部生のときに国内外を旅行して、美しいまち並みや、まちづくりへの興味を持ち、都市計画研究室を選びました。



3年生のとき、海外研修旅行のミラノにて。手前左から2人目が立唐さん。

当時は3年生の12月ごろから就職活動がはじまりました。自分は何が好きで、どんな職業に就きたいのか、自己分析をしても明確な目標が定まらず、建築関連の企業を幅広くエントリーして、結果、2社から内定をもらいました。しかし、どちらも志望度があまり高くない会社でした。当時は、今ほど好景気ではなかったので、就職すべきか、10月1日の内定式の日まで悩みました。内定をいただいた会社の方に、何度も話を聞きましたが、数年後、その会社で何を実現したいかというイメージがわからず、働き続ける自信もありませんでした。そこで、より専門性を身に付けた上で社会に出ようと思い、大学院進学を決心したのです。

社会へ出るのが遅れることへの不安はありましたが、大学院での貴重な時間を存分に利用しようと、朝は大学の図書館内の新聞全紙(確か8紙ぐらい)に目を通し、世の中の動きを掴み、まちづくりや都市開発関連の記事はスクラップしていきました。

大学院の講義は、社会の第一線で活躍されている方の科目も多数あり、単位に関係なく他専攻も含め、多くの授業を受講しました。ときには、夜に六本木ヒルズで開催されていた都市・まちづくり関連のビジネススクールに通い、社会人の方とできるだけ話をし、将来の目標を明確にするように心がけていました。

大学院の就職活動では、職種をかなり絞り、優先順位をつけて効率的に行いました。憧れてきた大規模開発、またオフィスやマンションに留まらず、庁舎や劇場などの公共性の高いものを手掛ける会社を中心に就職活動を進めました。建築も都市開発も、地域の環境や歴史的背景の特徴を汲み取った上で進められます。そこで、多くの実績や、社内に設計部や技術センターなどがあり、さまざまな分野の専門家とプロジェクトを進められることに魅力を感じ、現在の会社を志望しました。

入社してからは、主に都市開発の業務に関わってきました。内容は、民間・公共のコンペ提案やコンペで当選したプロジェクトの実現に向けた推進業務です。具体的には、事業者として、都市計画許認可手続きなどの行政協議や事業計画を作成します。規模が大型になると社内外の関係者も多くなるので、あらゆる立場の人にとって最大のメリットが発揮されるように全体を調整し、プロジェクトを推進していきます。この5月にオープンした「品川シーズンテラス」にも関わっていました。

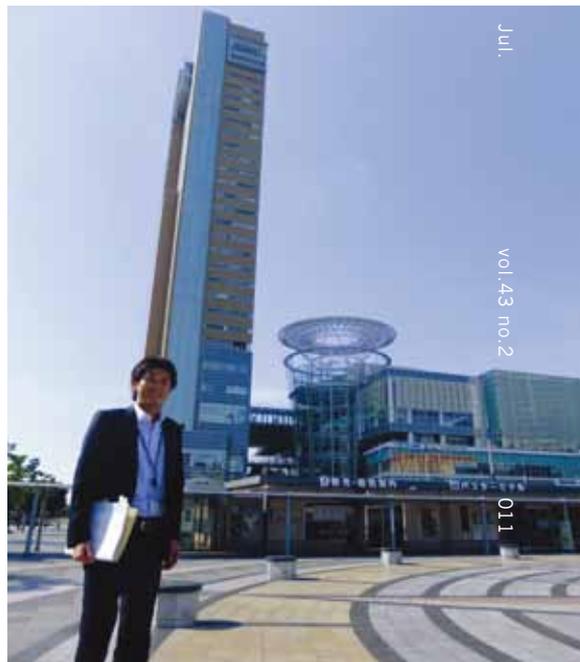
今は、グループ会社に出向中で、四国一の高さを誇る「高松シンボルタワー」の運営・管理を行っています。この施設は、オフィスや商業施設、国際会議場、音楽ホールなどで構成される複合施設です。主な業務は

区分所有者の3者(香川県、高松市、シンボルタワー開発)でつくられた組織の事務局で、年間数億円の予算の作成、業務委託入札の実施、本施設でのコンベンションの誘致活動など幅広い業務に携わっています。

大変なことは多いですが、やりがいも大きいです。長い時間をかけて計画してきたものが、いくつもの難局を乗り越え、目に見える空間として実現し、社内外のメンバーと共に大きな喜びや達成感を分かち合えることは、何にも代えがたいです。

学生時代は、やりたいことが見つからなければ、まずはわくわくして夢中になれるようなことを考えて、そして、行動してみてください。途中で何か違うなと感じたら軌道修正して、また一歩ずつ前へ進めばいいと思います。途中で後退しても構いません。何よりも自分で体験し、自分で判断して進むことが大切です。役に立てることがあれば、都市計画研究室を通じて、私まで気軽にご連絡ください。■

現在、運営・管理を行う、香川県にある四国一の超高層ビル「高松シンボルタワー」の前にて(併設のホール部分の設計協力を本杉省三先生が担当)。



日本の伝統から近・現代までを見つめる関西地方への旅



比叡山延暦寺にない堂。山中にやさしく佇むが、常行堂（左）と法華堂（右）内部は厳しい修行が行われる空間でもある。両堂の間は廊下で接続されている。廊下の下は通り抜けでき、奥の釈迦堂へと続くゲートにもなる。



日吉大社東宮。各建物の向きと配置の軸線が微妙にずらされている。緩やかな傾斜の敷地に合わせるように配置される建築群とその環境が美しい。



西芳寺庭園。室町時代、庭園全体が禅の境地の世界を再現した道場であったが、長い年月のうちに建物も失われ、今では苔むす庭園となった。昔の姿を偲びながら庭園をめぐる。



甲南女子大学。キャンパスの全体計画と各棟の設計は村野藤吾が行った。各棟とも緩やかな傾斜の敷地に巧みに配置されている。建物の構造と窓を組み合わせたリズムのあるファサードも見所。



旧山邑邸。フランク・ロイド・ライト設計。2・3階は水平が強調されているが、最上階の食堂に到達すると上昇感のある空間が待つ。

建 築史・建築論研究室が企画・実施する関西研修旅行（毎年2～3月）では、関西地方の古代から近代までの、誰もが知っている代表作から、あまり知られていない名作までを巡っている。この旅行の魅力は、何といっても、数々の発見が得られることだろう。私も学部2年の頃から欠かさず参加しているが、毎年、建築の見方が変化していることに気づかされる。それまでの自分の建築観を見直すような建物との出会いも何度かあり、毎年刺激のある旅行となっている。

その関西研修旅行も今年で38回目を迎え、5日間をかけて、滋賀、奈良、京都、大阪、兵庫の5県を巡った。参加学生は41人、教員・卒業生を含め総勢51人が参加した。初日は比叡山延暦寺へと向かった。今でも修行が行われている神聖な山の空気を肌で

感じながら、その中に佇む建築の数々を堪能した。また奈良では、「靈山寺本堂」（1283）や「長弓寺本堂」（1279）といった中世和様建築を見学した。毎年恒例の文化財の修復現場見学では、「知恩院御影堂」（1639）と「東寺築地塀」を拝見し、東寺では建築史・建築論研究室を卒業した千田真由美さん、中村林太郎さんに解説していただいた。近代建築では、村野藤吾をテーマに「甲南女子大学」（1964-88）、「大庄村役場」（1942）、「綿業会館」（1931）を巡り、様式主義からモダニズムまで幅広くこなす彼の作品に触れた。最終日はF.L.ライトの「旧山邑邸」（1924）、ライトの弟子遠藤新の「旧甲子園ホテル」（1930）を見学し、立体的で変化に富んだ空間を体験した。

見学した建築の数々には、現代でも学ぶ

ことのできる要素が詰まっているように思う。来年、ぜひとも、建築を学ぶ上でのヒントを見つけに来てみては。

【日程・行程】

- 2月28日（土） 日吉東照宮、日吉大社、比叡山延暦寺（根本中堂、にない堂）
- 3月1日（日） 法隆寺（中門、近藤、五重塔、夢殿、講堂、食堂、夢殿など）、慈光院、靈山寺、長弓寺、般若寺
- 3月3日（月） 東寺〔教王護国寺〕（築地塀修理現場、金堂、講堂、五重塔）、西芳寺、知恩院（御影堂修理現場）、佳水園
- 3月4日（火） 甲南女子大学（芦原講堂、阿部記念図書館など）、大庄村役場、関西学院大学
- 3月5日（水） 綿業会館、旧甲子園ホテル、旧山邑邸

Report 短大建築見学

text= 山崎誠子 短大准教授

引率教員：羽入敏樹、酒匂教明、佐藤秀人、山崎誠子、高安重一、星和磨、廣石秀造

展示デザインを学びに国立歴史民俗博物館へ

短

大1年生を対象としたオリエンテーションを、4月9日(木)にキャンパス内で済ませ、恒例の建築見学を5月30日(土)に、佐倉市にある「国立歴史民俗博物館」で行った。この博物館(設計：芦原義信)は1981年に開館され、日本の原始から現代までの民族世界を3万㎡を超える空間に展示している。

当日は、103名(1年生90名+2年生13名)の学生たちが参加。午前中は、主に商業施設や文化施設の空間をディスプレイ的手法でデザインする丹青ディスプレイの渡部正隆氏をゲストに迎え、歴史民俗博物館や江戸東京博物館(1993/菊竹清訓)の事例を通して、学芸員の仕事や展示デザインについて、レクチャーを行っていただいた。

その後、昼食を挟んで、午後は館内を自由に見学することとしたが、展示内容だけでなく、展示方法、空間の使い方、模型の作り方も注視するよう指示したため、時間が足りなく感じた学生もいたようだ。 設



Report 建築学科2年生オリエンテーション

text= 井口雅登 助教

引率教員：建築学科の教員

作品見学からものづくり体験までの9コース

6月20日(土)に、毎年恒例の2年生オリエンテーションが実施された。このオリエンテーションは、船橋校舎から移行してきた2年生が建築の見学などを通して教員や先輩の学生と交流するイベントで、今年も建築作品見学や歴史探訪、ものづくり体験などの趣向を凝らした全9コースで行われた。

当日は梅雨の晴れ間にも恵まれ、2年生218名、引率の4年生・大学院生47名、教員39名の合計304名が参加した。どのコースとも、教員や先輩学生と一緒に授業とは違った視点から建築を学び、2年生はいつもとは違う表情を見せていた。



【コースの概要】：Aコース：『環境×建築の作品・技術を体験しよう』／Bコース：『新緑の軽井沢・新建築をめぐるコース』／Cコース：『東京近郊の建築をめぐるツアー～学会賞受賞作品を中心として～』／Dコース：『懸造(かけづくり)からモダニズムへー構造デザインの秀作を巡る』／Eコース：『横浜の歴史探訪とみなどみらい21 散策』／Fコース：『カジュアルに語らう昼食会+達人の話芸を学びプレゼン能力を磨く』／Gコース：『内側から楽しむ東京ドームと日建設計』／Hコース：『ものづくり体験コース～木材を継ぐ～』／Iコース：『最新省エネ技術に触れ、娯楽施設で代謝率(Met)を知る』

5大学の学生ワーキンググループが作り出す建築学生の建築展

5月31日(日)から6月3日(水)の4日間、第38回学生設計優秀作品展が開催された。

この展覧会は、建築模型材料や製図用品を販売するレモン画翠が主催することから、「レモン展」の名で知られている。今年で38回目を迎えるレモン展は、お茶の水周辺の理工系大学及び専門学校5校の卒業制作展として1978年に始まっており、長い歴史を持つ展覧会となっている。今年の参加校は55校98学科と増え、過去最大規模のものであった。また、開催期間中は作品展示以外にも様々なイベントが行われていた。

開催初日は、毎年著名な建築家が審査員に招かれ、出典作品を対象とした講評会が行われているが、今年は長谷川逸子氏を審査委員長とした5名の建築家によって審査が行われた。ポスターセッション及び公開審査会を経て、レモン賞10点、審査員個人賞各1点(計5点)が選出された。

2日目は、建築系及び美術系の大学に所属する学生から募ったポートフォリオを対象に、公開で審査する「Portfolio Review 2015」が行われた。プロダクトデザイナーやグラフィックデザイナー、そして建築家といった専門分野の異なる審査員4名によるディスカッションの結果、最優秀賞1点、審査員個人賞各1点(計4点)、特別賞1点が選出された(P17参照)。

3日目は、今年卒業設計を経験し、現在大学院に所属している学生達による公開ディスカッション、「92年世代のマニフェスト」が行われた。ゲストスピーカーとして招かれた4名の若手建築家とともに、アツい建築トークが繰り広げられていた。

毎年レモン展では、展覧会の開催準備から運営、閉会後の撤収までを、5つの大学で編成された学生ワーキンググループで担当して行っている。日本大学理工学部建築学科は例年同様、企画会議やポートフォリオレビューの会場構成などに、積極的に多数の学生が参加した。



講評会の様子。明治大学駿河台キャンパス「アカデミーホール」で開催された。



ポスターセッションで審査委員長の長谷川逸子氏の質問に答える出品者の学生。



展示会場の風景。



「Portfolio Review 2015」の会場の様子。ポートフォリオを乗せる什器のデザイン、及び製作も全て学生達によって行われている。



「92年世代のマニフェスト」でのディスカッションの様子。4時間半に渡る議論が行われた。

photo= レモン画翠

【第38回学生設計優秀作品展 - 建築・都市・環境 -】
会期：2015年5月31日(日)～6月3日(水)
場所：明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン2F

【講評会】

開催日：5月31日(日)、審査委員長：長谷川逸子、審査委員：五十嵐淳/比賀武彦/平田晃久/藤村龍至
司会進行：門脇耕三

【Portfolio Review 2015】

開催日：6月1日(月)、審査員：吉田晃永/刈谷悠三/富永美保、司会進行：古澤大輔

【92年世代のマニフェスト】

開催日：6月2日(火)、ゲストスピーカー：山道拓人/西川博美/連勇太郎/西倉美祝、司会進行：古澤大輔

【学生ワーキンググループ】

共立女子大学/東京電機大学/日本大学/法政大学/明治大学の5大学により編成された学生チーム。本学からの参加学生は以下の通り。橋本和弘(学生代表/古澤研M1)・清水亮輔(今村研M1)・齋藤佑樹(佐藤光彦研M1)・白木大一(同)・宮島由香(同)・川田実可子(古澤研M1)・小関眞子(今村研M1)・建石洋(山中研M1)・百瀬優哉(古澤研M1)・石田敬幸(同)・永井雄介(山中研M1)

今年もさまざまなジャンルのゲストが登場！2015年度オウケンカフェ開始

理工建築にとどまらず、日大建築系すべての卒業生による会「**日本大学桜門建築会**」、略して「**桜建会**」。その桜建会が企画してゲストを招くレクチャーシリーズ「**オウケンカフェ**」が2013年7月から月に1度のペースで開催されている。卒業生はもちろんのこと、現役学生たち、また外部の誰もが参加可能だ。今回は、建築家の稲垣淳哉さんと建築家の佐々木高之さんのレクチャーについて、ふたりの学生によるレポートを紹介。

2015年度のシリーズがはじまった。さまざまな世界の最前線で活躍する人の話から、学ぶことは多いはず。大学の授業だけでは伝えることができない、さまざまな世界の話聞いてみよう！

2015年度開催スケジュール

- 4月22日(水)【終了】稲垣淳哉(建築家/Eureka共同主宰)
- 5月25日(月)【終了】佐々木高之(建築家/アラキ+ササキアーキテツ)
- 6月24日(水)【終了】北川貴好(アーティスト)
- 7月22日(水)吉里裕也(東京R不動産/SPEAC inc.)
- 9月30日(水)野田恒雄(建築家/横浜市都市整備局デザイン室)
- 10月28日(水)岡部友彦(コトラボ)
- 11月25日(水)浜田晶則(建築家/浜田晶則建築設計事務所)
- 12月21日(月)高山明(演出家/Port B)

* 毎回19時スタート。場所は、駿河台キャンパス5号館5階スライド室1。参加費は、桜門建築会会員・日本大学学生は無料、それ以外は1,000円(当日に入室すれば無料)。会場ではキャッシュオンにてドリンクを販売します。

学生レポート

vol.19 / 2015.04.22 WED.

ゲスト：稲垣淳哉(建築家/Eureka共同主宰)



| 小杉真一郎(4年)

「**極** 大と極小を結ぶ、フィールドワークから空間運営へ」という題目で、Eurekaの稲垣淳哉さんにお話をうかがいました。大変緻密で刺激的なお話でした。惜越ながら、私が感じたことを大きく2つに絞って書こうと思います。

1. フィールドワークについて

フィールドワークは、あまたの建築家を取り組んできた方法論である。「考現学」今和次郎、「デザインサーヴェイ」伊藤ていじ、(近年、より設計に反映されたという意味で)「集落の教え」原広司など、国内にも先駆者が多数存在する。

稲垣さんは、早稲田大学のアジア高密度住宅における研究の系譜を汲んでいる。稲垣さんは、そのフィールドワークの知見を経験的に抜き取り援用することで、デザインソースとしていた。その際に、それらを造形として

ではなく、あくまで空間構成として用いていた点が、興味深いと思った。

2. ユニット派としての組織形態などについて

通常、計画・意匠サイドは、エンジニアリングサイドの構造・環境を、定数と捉えがちである。しかし、4分野をフラットに変数と捉えたことにより生じた複雑な全体性には、改めて感銘を受けた。また、そのような全体性を獲得したことにより、人々やモノが、概念より先、あるいは同等にある関係性が構築されている。さらにはその関係性によって、新しい物語が自律的に発生していくような建築像を予感させた。

その他にも、私が現在取り組んでいる設計課題や卒業設計に関連しそうなトピックが多く、考える機会をいただくことができました。稲垣さん、どうもありがとうございました。■

vol.20 / 2015.05.25 MON.

ゲスト：佐々木高之(建築家/アラキ+ササキアーキテツ)



| 野下啓太(4年)

「**H**ands-on approach」、佐々木高之さんが共同主宰するアラキ+ササキアーキテツが他の事務所と差をつけていることだ。「Hands-on approach」とは、佐々木さんが留学したイーストロンドン大学のやり方で、手を動かし、モックアップなどをつくり、思考の幅を広げていく方法である。そのため、当初から施工も自分たちで行い、施工専門のスタッフも所属している。専門のスタッフがいることで施工単価が抑えられ、これまでになかった発想が生まれることがメリットであり、興味を持った。また、竣工が完成ではなく、クライアントが今後手を加え、経年変化をし続けるという点に感銘を受けた。

国内だけではなく、ジャカルタなどの海外での仕事も経験している。今後の発展として「Hands-on approach」を用いながら、公共建築などの大きい建築もつくりたいとおっしゃっていた。しかし、「Hands-on approach」が公共建築などの大きい建築にも応用できるのか疑問を感じた。どこまで大きい建築に介入できるのか、これからどのようにして展開させていくのかとても気になる。■

1 | 非常勤講師の福島加津也さん、八木佐千子さん、 今村水紀さんが、2015年日本建築学会各賞を受賞！

非常勤講師の福島加津也さんが、「木の構築 工学院大学弓道場・ボクシング場」（富永祥子さんと共同設計、富永さんも2006～11年まで非常勤講師）にて「2015年日本建築学会賞（作品）」を受賞した。同時に「上州富岡駅」にて同賞を受賞した鍋島千恵さんも、昨年度まで非常勤講師を務めていた。

また、大学院非常勤講師の八木佐千子さんが、「山鹿市立鹿北小学校」（古谷誠章さん、山室昌敬さん、稲山正弘さん他2名と共同設計）にて「2015年日本建築学会作品選奨」を受賞、非常勤講師の今村水紀さんが、「駒沢公園の家」（篠原勲さんと共同設計）にて「2015年日本建築学会作品選奨新人賞」を受賞した。



「駒沢公園の家」 photo=Takashi Suo



「山鹿市立鹿北小学校」 photo= 浅川敏



「木の構築 工学院大学弓道場・ボクシング場」 photo= 小川重雄



2 | 日本造園学会国際アイデアコンペティションにおいて 小関眞子さん(M1)と中辻千尋さん(同)が優秀賞(2等)を受賞

「U-30 国際アイデアコンペティション」（主催：日本造園学会）において、建築学専攻1年の小関眞子さん（今村研）と中辻千尋さん（同）による作品「微世界のヘテロトピア」が優秀賞（2等）を受賞した。テーマは「2105年、公園のない／ある未来」。応募総数200作品の中から、大学生グループの作品として最上位の評価を得た。



提出された作品「微世界のヘテロトピア」。



受賞式にて、展示パネルの前で、小関さんと中辻さん。

3 | 第 38 回学生設計優秀作品展特別企画「Portfolio Review 2015」において 稲葉来美さん(4年)、尾崎健さん(同)、小山恭史さん(同)が各賞を受賞

「第 38 回学生設計優秀作品展」(通称：レモン展)の特別企画「Portfolio Review 2015」において、建築学科 4 年の稲葉来美さん(佐藤光彦研)が「富永美保賞」、尾崎健さん(同)が「刈谷悠三賞」、小山恭史さん(同)が「古澤大輔賞」を授賞した。審査員賞は最優秀賞に次ぐもので 4 名が選ばれた。



会場の明治大学駿河台校舎アカデミーコモンにて賞状と共に、左より小山さん、尾崎さん、稲葉さん。



尾崎さんの作品。



小山さんの作品。



稲葉さんの作品。

■受賞

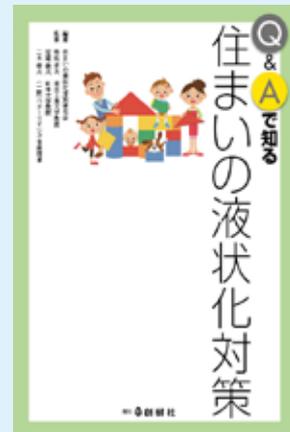
・神田順特任教授が「平成 26 年度日本風工学会 学会賞(功績賞)」を受賞した。本賞は日本風工学会および風工学の発展に関する顕著な功績をなしたと認められる者に授与され、功績名は「耐風構造学の研究および教育に関する功績」である。耐風構造学において、風荷重モデルの体系化および建築物の強風に対する性能設計の道筋を示し、さらに長年にわたる風工学の研究・教育に関する功績を認められての受賞である。

■出版

・岡田章教授、宮里直也准教授、秦一平准教授、廣石秀造短大助手が執筆した「高さが 60m を超える遊戯施設の主要な支持部分に係る構造方法に関する検討」が、日本建築設備・昇降機センター「建築設備&昇降機」No.115(2015.5)に掲載された。当原稿の基となる研究は、平成 25 年度国土交通省建築基準整備促進事業において、岡田教授を委員長として行ったものである。

・安達俊夫教授は、住まいの液状化対策研究会編著の『Q&A で知る 住まいの液状化対策』(創樹社)を監修、発行した。一般市民向けに、78 項目の Q&A 方式で住宅の液状化対策についてわかりやすく解説している。

・田所辰之助教授は、池田祐子さんとの共訳でジョン・V・マシュイカ著『ビフォーザバウハウス 帝政期ドイツにおける建築と政治 1890-1920』(三元社)を上梓した。本書は、バウハウスに先んじてドイツで進められていた建築・デザインの改革について明らかにしている。



2015 年度の新しい 14 名の非常勤講師を紹介！

理工 一瀬賢一 (いちせ・けんいち)
(建築生産実験)



1982 年名古屋工業大学大学院工学研究科建築学専攻修了。1982 年 (株)大林組入社。現在 同技術研究所生産技術研究部長。

今年度から建築学科 2 年生の「建築生産実験」を担当いたします。私は、学生時代から現在まで一貫して、コンクリートの研究・開発に取り組んできました。コンクリートは、料理をつくることと同じようにつくり手の考え方と技量により出来上がりが異なります。一般的なコンクリートから強度の高いものや流動性の良いコンクリート。骨材を変えると軽いものや重いコンクリート。繊維を入れると靱性の高いコンクリートなどいろいろつくることができます。建築生産実験では、コンクリートを通して、実験の楽しさ、モノづくりの面白さを伝えたいと思います。 **験**



今村水紀 (いまむら・みづき)
理工 (デザイン基礎・建築設計 I)



1999 年明治大学理工学部建築学科卒業。2001-08 年妹島和世建築設計事務所。2008 年 miCo. 設立。現在、女子美術大学、日本工業大学、明治大学、東京理科大学非常勤講師。

建築の設計の仕事が好きです。大変なことも多い気がしますが、全体の印象としては、楽しいと感じています。設計の授業の中で、学生の皆さんがその楽しさを知るきっかけを作れるといいと思っています。皆さんの「楽しい」とか「好きだな」というスイッチは、何のきっかけで入るか分からないし、むしろ、授業中より、素晴らしい建築を訪れた時にふと入ることの方が多いかもしれません。でも、設計課題も、比較的スイッチが作動しやすい状況だと思っていますので、一緒に楽しみながら、課題に向き合っていきたいと考えています。 **験**



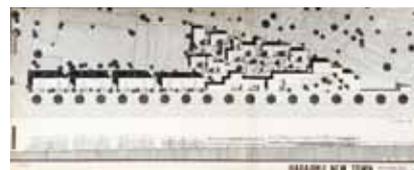
駒沢公園の家 photo=Takashi Suo

理工 永曾琢夫 (えいそ・たくお)
(建築設計 III・IV)



1982 年日本大学理工学部建築学科卒業 (椋建築賞受賞)。1982 年久米建築事務所 (現久米設計) 入社。1998 年谷口建築設計研究所入所。2014 年設計計画設立。

この度は、日本大学理工学部建築学科の建築設計の非常勤講師に任命いただき、大変光栄に思っております。自分の出身校で、自分が学生時代、本当に寝食を忘れ取り組んだ建築設計の授業に関われることに、非常に喜びを感じております。建築設計は、大学の授業の中でも、最も自由な授業であり、他の授業で学んだことを含め、総合的に物事を同時に解決する (Architecture) 貴重な体験ができる瞬間です。設計に進む、進まないに関わらず、このような体験ができる数少ない瞬間です。実社会において役に立つ瞬間が必ず訪れます。この時間を無駄にせず、共に考え、共に成長しましょう。 **験**



大学 2 年設計製図後期課題 集合住宅：S° / 教室保存

the new teachers

理工 遠藤克彦(えんどう・かつひこ)
(建築設計Ⅱ・Ⅲ)



1992年武蔵工業大学(現東京都市大学)工学部建築学科卒業。1995年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。1997年遠藤建築研究所設立。1998年同大学院博士課程退学。2007年(株)遠藤克彦建築研究所に組織変更。

今年より2年生の「建築設計Ⅱ・Ⅲ」を担当させていただき遠藤克彦です。設計製図の授業は毎回毎回のエスキースの積み重ねが非常に大切で、前回の提出内容を毎回リファインし続けるには、建築デザインという格好よい響きの向こう側での忍耐強さが求められます。設計が上手くなるためには製図の授業に出席するだけでなく、どこが各自の設計案の良いところなのか、そして問題点はどこなのかを先生とのディスカッションを通して「積み重ねていく」ことが大切です。その過程は実社会の建築設計活動となんら変わるところはありません。君たちが社会に繋がっていくための最初のスタートがここにあります。頑張ってください。



豊田市自然観察の森ネイチャーセンター photo=上田宏

理工 大塚秀三(おおつか・しゅうぞう)
(建築生産実験)



1993-98年川口通正建築研究所。2005年ものづくり大学技能工芸学部建設技能工芸学科卒業。2007年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程修了。2013年同大学院博士後期課程修了。2013年ものづくり大学技能工芸学部建設学科准教授。

今年度から建築生産実験を担当することになりました大塚です。コンクリート工学を中心とした建築材料の研究を専門としています。授業では、建築物の骨格となる構造材料である木材、鋼材およびコンクリートに関する実験を行います。実験を通じて材料の持つ強度特性を把握するとともに、これに及ぼす各種要因の影響を考察します。材料の特性は、建築物の設計および施工に不可欠な知識です。この授業を通して、構造材料の基礎的な強度特性について理解を深めてください。



木材の縦圧縮試験

理工 加藤亮一(かとう・りょういち)
(建築構法Ⅱ)



1979年日本大学理工学部建築学科卒業(木村研究室)。鹿島建設入社。超高層ビル現場などで施工管理を担当し、2000年から作業所長として複雑な形状の建物や音楽ホール・美術館などの文化施設を担当。

ゼネコンで施工管理一筋、ものづくりの苦勞・楽しさ・達成感を体験してきました。皆さんが建築学科で学んでいることは、すべて建築物をつくるために必要な知識です。逆に言うと、ものづくりの現場には建築学のすべてが凝縮されているということです。「建築構法Ⅱ」では、建築物がどのように成立しているのか、それをどうやってつくり上げていくのか、実際の施工計画・技術を具体的に紹介します。いま皆さんが日々学んでいることが、どのようにものづくりにつながっているのかを知って、その楽しさに気付いてもらいたいと思っています。



ピアス銀座ビル(2009)

短大 川嶋 勝(かわしま・まさる)
(美術・デザイン史)



1996年日本大学理工学部建築学科卒業。1999年同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(建築史・建築論研究室)。1999-2000年東京大学生産技術研究所研究生(藤森研究室)。1999年鹿島出版会。

大きな瞳のアニメキャラ。古代ギリシャの女神像。どちらが美しいのでしょうか。美の基準は、個人の好みはもちろん、時代や地域によって大きく変わります。美術史と聞くと、すこし難しく思われるかもしれませんが、美しさとは、美味しさ、楽しさと同じくらい身近で大切な感覚です。私は出版社で建築やデザインの本を編集していますが、レイアウトが美しければ、硬い論文にも興味がわき、古ぼけた写真も魅力的に見えてきます。逆に、すばらしい写真がレイアウト次第で台無しにも。そんな美しさの意味を、一緒に考えていきましょう。



『建築家ピエール・シャローとガラスの家』(鹿島出版会、2014)

the new teachers

北 茂紀(きた・しげのり)

理工 (木質構造特論)



2000年近畿大学理工学部建築学科卒業。MAY COMPANY、LINK SYSTEM 勤務を経て、2004-06年青年海外協力隊員。2010年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程前期修了。2010-14年増田建築構造事務所。2014年北茂紀建築構造事務所設立。

私 は30歳から構造設計という分野に足を踏み入れました。それは意匠事務所での実務経験、途上国での活動経験より、構造が建築設計において非常に重要なものであると痛感したからです。そして構造設計は色々な扉を開いてくれます。伝統・文化財、防災・災害復興、途上国支援、大いに脱線しながら、様々な分野での構造設計の可能性について一緒に考えていきましょう。 **監**



興善山歎喜院大森寺

斉藤丈士(さいとう・たけし)

理工 (建築生産実験)



1993年日本大学生産工学部管理工学科卒業。2006年千葉工業大学大学院工学研究科博士後期課程修了。1993-2012年内山アドバンス。2012-14年日本大学生物資源科学部生物環境工学科助教。2014年同准教授。

漢 書からきた「百聞は一見に如かず」ということわざがあります。インターネットが普及して即座に膨大な情報を手に入れることのできる現代では、「百聞」が「五十聞」や「三十聞」になっているのかもしれませんが、実際に自分の目で見て触れる「一見」によって得るものが大きいことに変わりはありません。建築材料の分野も同様で、一度でも実際に見て触れることで教科書や講義からは想像しきれない部分での気付きがあると思います。皆さんにとって貴重な「一見」の機会となる実験の時間を共有して、一緒に学んでいきたいと思っています。 **監**



『ポイントで学ぶ鉄筋コンクリート工事の基本と施工管理』(井上書院、2015)
『コンクリートの調査と施工』(日本建築学会、2013)

式地香織(しきち・かおり)

理工 (デザイン基礎・建築設計Ⅰ)



1995年日本女子大学家政学部住居学科卒業。1997年同大学院修士課程修了。1997-2005年伊東豊雄建築設計事務所。2005年式地香織建築設計事務所設立。

1 年生がはじめて「建築」に触れる、そんな科目を担当させて頂くことになりました。私自身のことを振り返ると、大学で「建築」という領域に出会い、建築を「つくる」という視点で社会や地域、人間をみつめるようになってから、目の前の景色が変わり、世界が広がったような気がします。時には、今までの自分の経験や価値観を揺るがすような出来事もあるかもしれませんが、そんな変化を楽しみ、「つくる」ことの喜びを貪欲に追及し、素晴らしいアイデアやコンセプトを共有する、皆さんとの協働の時間をファシリテートしたいと思っています。 **監**



慈恵医科大学病院高木会館改修

田井勝馬(たい・かつま)

理工 (建築設計Ⅲ・Ⅳ)



1984年日本大学理工学部建築学科卒業。1984-2001年戸田建設設計部。2001年田井勝馬建築設計工房設立。

建 築をつくるということは、自分を表現することだと考えます。設計は自分の考えを組み立て、プランニングし、かたちにする難しい行為ではありますが、その生みの苦しみを味わってこそ、達成感も得られます。それが建築の醍醐味であり、建築家としての喜びでもあります。ですが、なかなか自分を見つけ出すのは困難です。学生の皆さんはまず、いろいろな建築に興味を抱き、見て、触れて、考えることです。そうすることによって建築家の思考を感じることができ、そんな中からヒントを垣間見ることができるとも思いません。 **監**



代沢医院の家 photo=大沢誠一

the new teachers

中田 弾(なかだ・だん)

短大 (建築ユニバーサルデザイン)

2006年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。2006-07年スタート CAM。2007-12年千代田区観光協会。2011年 D&A Networks 設立。2012-14年日本大学理工学部建築学科助手。2015年一般社団法人 D&A Networks 代表理事。

福祉や「建築」は、必ずデザインの先にユーザーがいます。さまざまな人々が快適に生活する、または空間を利用するためのデザインには、ユーザーの声を聞き、デザインに反映していくことも大切です。私自身も児童発達支援・放課後等デイサービス(児童福祉施設)を立ち上げる際には、改めて法律や設置要項を学ぶと共に、地域の利用者の声をお聞きし、デザインに反映しました。このように、障害者や子どもたちとの活動で感じる現場の感覚や、福祉の分野で必要となるデザイン・考え方を皆さんにお伝えしていきたいと考えています。



児童発達支援・放課後等デイサービス びかいち

八木佐千子(やぎ・さちこ)

理工 (建築設計マネジメント特論)

1986年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1988年同大学院理工学研究科建設工学専攻博士前期課程。1988-93年團・青島建築設計事務所勤務。1994年 NASCA を古谷誠章と共同設立。同代表取締役。

建築は、社会の環境と常に関わりを持っています。芸術、文化、政治、経済、倫理、哲学、歴史、技術といったあらゆる分野への知見を持って協働するコミュニケーション能力を鍛える必要があると思っています。そして、建築学科を卒業してからは、建築設計の仕事だけでなく、社会の数多の分野で活躍する場があります。「建築設計マネジメント特論」では、学生時代に建築の幅の広さ、奥の深さ、おもしろさを体感し、建築や自らの将来の可能性を模索する一助となることを期待しています。



実践学園中等学校自由学習館 photo=浅川敏

若松 巖(わかまつ・いわお)

理工 (司法と建築)

1979年東京大学法学部第1類(私法コース)卒業。1984年東京弁護士会に弁護士登録。2010-11年東京弁護士会副会長、日本弁護士連合会理事。現在、武蔵野民事調停委員。

請負契約の分野における過去の紛争の代表例を検討することによって、紛争発生の原因を考えるとともに、将来、学生諸君が会社を設立した場合、あるいは会社従業員になった場合紛争に巻き込まれることがないように、紛争発生を予防する方法を視野に入れた授業を進めるよう心がけたいと思っています。

 積極的なりサーチを！

日本大学理工学部建築学科、日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科には、毎年、さまざまな分野の第一線で活躍する方々が、非常勤講師として、さまざまな講座で教鞭に立られています。毎年、この紙面では、先生方の魅力のすべてをお伝えすることができないので、気になった先生がいたら、ぜひインターネットなどで、検索してリサーチしてみてください。あなたの好奇心をくすぐる先生が、必ずいるはずです。

「デザインすること＝社会を変えること」

text= 横河 健

「芸者はいかん芸者は……」という反応にビックリ、僕は意気消沈した……。それまで生徒の相談には何でも乗ってくれる、一応尊敬している高校の先生のリアクションだったからだ。自分の周りには大学受験で他校を受けようとするものなど誰一人いなかった。下からのエスカレーター式で問題さえ起こさなければ大学も約束されていた。僕も推薦を受け、行きたい訳ではないけれど大学の法学部政治学科の席は約束されていた。それでも中学生のときからの夢といおうか、モノづくりの世界、しかも「デザイン」という新しい世界に飛び込みたいと、ずっと思っていて、「先生、今度芸大を受けるんです!」と言ったとたんの反応だったから、ビックリというか、ガッカリしたのだ。

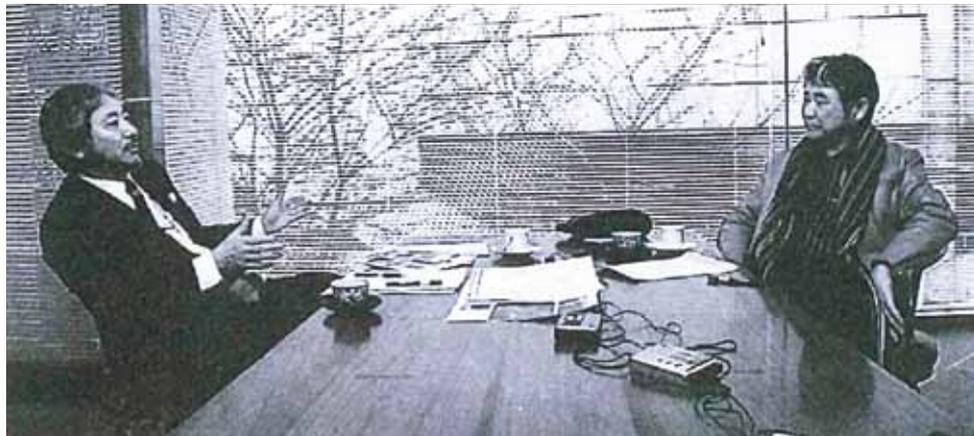
「こりゃダメだ……」僕は心の中でつぶやいて、でも学校を飛び出すことにむしろスッキリした感覚を覚えたような気がする。しかし、ろくに受験体制が整っていない僕には全く歯が立たなかった。ただこういったら失礼かもしれないが、美大なら大学はどこでも良かった。頭の中はグラフィック、プロダクト、インテリアと負け惜しみではないが、「デザインする」という言葉の響きがとても明るい未来を切り開く魔法の呪文のように思っていたから、その世界に入ることができれば良かったのだ。結局運良く日大芸術学部に入ることができた。それまで受験のためにデッサンや平面構成を習っていた個人の先生が、日大の芸術学部はバウハウスの影響があって教育に取り込んでいる、と話していたことが耳のどこかに残っていた。

そう、これが不思議。日大芸術学部の美術学科、当時の主任教授はバウハウス出身の



山脇 道子の学生証 引用=『バウハウスと茶の湯』(新潮社)

よこがわ・けん：1948年東京都生まれ。1972年日本大学芸術学部美術学科卒業。1976年設計事務所クレヨン&アソシエイツ設立共同主宰。1982年横河設計工房設立。2003-14年日本大学理工学部建築学科教授。2014年同特任教授。2004-06年日本建築家協会副会長。2009-11年東京大学大学院非常勤講師。



黒川雅之氏(右側)と対談 引用=「新建築 住宅特集 2004年5月号」(新建築社)

山脇先生だった。しかしこれも後々、ずうと後になって解ることなのだが、建築家・山脇氏はバウハウスに行く前、私の祖父(横河民輔)の事務所に在籍していて、しかも結婚の仲人をしたのも、なんと祖父母だった。不思議なつながりを感じる。ただ入学当時の僕は、建築のケの字も頭になかった。否、かすかに頭のどこかにあったかもしれないが、僕にとっての建築はまだ遠くにあったのだ。

デザインをすること、高校までの記憶に頼る勉強とは180度違って、新しいモノづくりの世界に入ると燃えていたのもつかの間、大学は日本中どこも学生運動が盛んになっていき、校舎を占拠、次第に授業も一切止まってしまったのだ。

ようやくスト状態から開放されて授業が再開されたころには、入学してからほぼ一年近くが経過していた。ウキウキ気分はとうに消えていたけど、新しいカリキュラムとともに新しい教育陣、先生も若く活動的な人が増えた。その中に黒川紀章氏の弟というふれこみの噂の先生がいた。建築家の黒川雅之氏だ。

黒川さんは眩しかった……。年齢もまだ30代と若く、自身も希望に燃えて仕事に教育へとチャレンジしていたのだろう。また当時、暗く重たいと感じていた建築から距離を置き、建築とプロダクトデザインの狭間にいるような人だったからか?

僕ら学生にとっては新しい材料による新し

い工法や説得力のある反骨精神のようなその意気にとても引かれ、魅力的に映ったのだ。つまり、難しいものと思っていた暗く重たい「建築」からの解放を感じていた。ここで当時の自分の心境を示す文章がある。私の仕事のうち、住宅に限った作品集『KEN YOKOGAWA landscape & houses』の中に掲載されている文章を引用してみることにする。

「インテリアデザインが単なる装飾でなく空間そのものを創造すること、家具や照明器具のデザインも建築家のテリトリーに入ること、さらに全く新しい素材が建築そのものの概念を変える、などと云うことを教えてくれた。若く社会を変えようと思っていた学生には大変魅力的に映った。こうして彼は私も解らず敷居が高いと思っていた“建築”の世界に、私を引きずり込んでくれたのだ。」

大学在学中、ワシントン州立大学への交換留学の経験も、僕にはとても貴重な経験を積ませてくれた。(このあたりのことは私の作品集を読んで欲しい)。幸か不幸か? 僕が建築に向かったのは君たち諸君よりずうと遅いのだ。本格的に建築に向かったのは大学を卒業してから、とり敢えず二級(建築士)の試験を受けてみたあたりからかも知れない。

いずれにしても、これが建築学科の学生でない僕が敢えて建築に向かうことを決心するに至った過程である。

Contents

- 02 **[SPECIAL FEATURE]**
学部卒業から、1年後・10年後
卒業生たちの今
- 12 **[REPORT]**
関西研修旅行
短大建築見学
建築学科2年生オリエンテーション
第38回学生設計優秀作品展（レモン展）
オウケンカフェ
- 16 **[NEWS & TOPICS]**
2015年度非常勤講師新任紹介
その他
- 22 **[Architecture & Me]**
vol.80 デザインすること = 社会を変えること（横河 健）
- 24 **[EVENT REVIEW]**
mosaki のイベント巡礼 vol.13
「藤本壮介展 未来の未来」

SHUNKEN

2015 Jul. Vol.43 No.2

「駿建」

発行日：2015年7月1日

発行人：中田善久

編集委員：宇於崎勝也・佐藤慎也・井口雅登・長岡篤・古澤大輔・宮田敦典・山崎誠子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：<http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

event review

mosakiのイベント巡礼 vol.12

藤本壮介展 未来の未来

会場：TOTOギャラリー・間
2015年4月17日（金）～6月13日（土）

私たちが思い起こすものが、 藤本さんが見せたかったもの!?

♥ぐざぎ……。久しぶりにキタなコレ……。言葉が見つからないよ。ていうか言葉が見つからなくて当然なんだよ、今回は！

◆しょっぱなから開き直るなよ。

♥だって。会場で本当に展示されていたものはね、実体もない、目にも映らないものなんだよ。

◆何言ってるの。会場の写真見たけど、たくさんあるじゃん、模型。実際に建てられたものもあったようだけど、そうでないものは何の模型だったの？ なんか、ゴミみたいなもの隙間に人物模型を置いて、空間の存在を作って見せていたようだったけど。

♥ゴミはただのメタファーなんだよ。日常の、目の前の、どんなところにも未来の種が、つまり建築の可能性が、そこかしこに存在しているって。ただひたすらに、そのことを伝えるために、いろんな身近な素材から、空間を抽出するようなものを展示していたんだと思う。

◆この無数の模型は、藤本さんの頭の中って感じ

なのかな？

♥うーん、重要なのはそこじゃないように思った。藤本さんの頭の中から出てきたことは間違いないんだけど、あくまでそれはサンプルというか、ツールというか。さっきも言ったけど、展示と向き合った私たちが、それぞれに思い起こすものこそ、藤本さんがこの展覧会で本当に見せたかったものなんだと思う。

◆作家って、どこからインスピレーションを得た結果を、作品なり展覧会でアウトプットするけれど、この展覧会は逆のルートなんだね。

♥そうそう！ つまりそれは、藤本さんが作家ではなく、建築家だからなんだよ。

◆どちらかというと作家性の強い建築家のひとり、という印象が強いけれど。

♥私は今回でそれ、覆されちゃった。これまでは何となく、抽象的な言葉で煙に巻かれてしまうように思っていたけれど、今回はド直球。建築って何か、建築家とは何かって、未来をテーマに語り

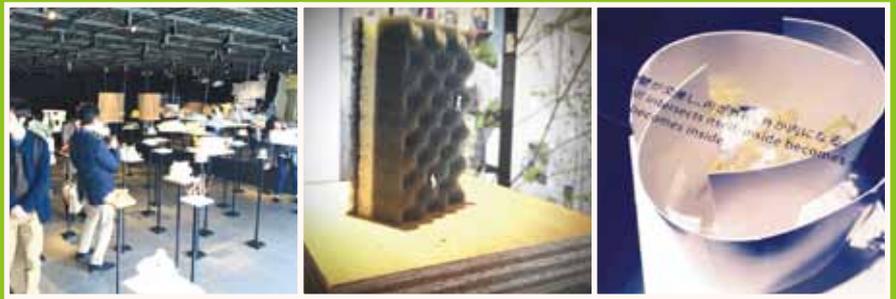
尽くすものだった。それも言葉だけでなく、模型だけでもなく、そこにある状況の可能性、すべてを駆使して。

◆なるほど。展示物のユニークさ、そこに付けられたキャプションの詩的なテイストに、つい印象が引っ張られそうになるけど、伝えていることは意外と骨太なのかな。

♥そうそう。展覧会を自分の作品発表ではなく、完全に触媒として扱って、観覧者との化学反応こそを本質に据えていた。すっごく建築家らしいふるまい。

◆骨太でありながら、建築関係の展覧会で伝わってくる内容としては、これまでにない感じだね。

♥一見とっつきやすいように見せる度量と、そこからの深度がすごい。その姿勢はそのまま、藤本さんの設計する建築物そのものの姿勢ともリンクするし。展示の量というより、それを見たこちらの内部に湧いてくるものの量が、ものすごい。ああ、まだ興奮が覚めないくらいだよ！



会場全体に131もの小さな模型が浮いていた。すべてにキャプションが添えられている。このキャプションが、とてもいい。添えられた言葉と小さな模型から、見るものにさまざまなことを思い起こさせる。

Recommend | 2014年7月 - 10月

【1】「小屋フェスティバル」| 長野県茅野市豊平南大塩の尖石遺跡周辺 |

会期：2015年7月25日（土）～8月2日（日）

昨年、東京・虎ノ門で14棟の小屋を展示販売し、1万人以上の来場となった「小屋展示場」が、今年は長野で規模を拡大し「小屋フェスティバル」として行われる。合計20棟のユニークな小屋が集まるほか、地元食材を使った飲食や物販、DIYワークショップ、流れてくる音楽を楽しみながら、小屋という小さな空間を思いきり体験できるフェスティバルとなりそう。

【2】「オスカー・ニーマイヤー展 ブラジルの世界遺産をつくった男」| 東京都現代美術館 |

会期：2015年7月18日（土）～10月12日（月・祝）

2012年に104歳で亡くなる直前まで精力的に設計を続けたブラジルのモダニズム建築の父、オスカー・ニーマイヤーの展覧会が、東京に！ ほぼ1世紀にわたる建築デザイン活動の全貌を、図面、模型、写真、映像などによって紹介。会場デザインを手掛けるのは、ニーマイヤーに大きく影響されたというSANAA(妹島和世・西沢立衛)。約500m²のアトリウムの大型空間に展示されるイピラプエラ公園の30分の1の模型をはじめ、ダイナミックかつ有機的な曲線で会場を構成する。

【3】「第22回 空間デザイン・コンペティション」|

登録締切：2015年8月7日（金）、作品応募締切：2015年8月21日（金）

毎年、日本電気硝子が主催しているコンペティション。賞金総額は270万円！ 審査員は、大学院で非常勤講師を務める山梨知彦先生（建築家/日建設計）や建築家の藤本壮介さんほか、豪華布陣。学生の皆さんであれば「A. 提案部門」にチャレンジ。今年のテーマは、「あたたかいガラスの家」です。A2判1枚に、あなたが考える新しいガラスの美学を切り開く「あたたかいガラスの家」を密度高く提示してみよう。詳細はWEBサイト（<http://www.neg.co.jp/kenzai/compe/>）をチェック！

[編集後記]

今号の特集では、8名の卒業生の皆さんに、就職にまつわる学生当時の不安から、現在の仕事の内容、やりがいに至るまでをうかがいました。先輩たちの話を読んでみると、就職について、漠然とした不安を持つことは、誰しもが通るものなこと、さらに、その不安をはねのけて進むには、自分の行動力と決断力しかないということを教えてくれます。しかし、単位を積み重ねることで、就職はできません。授業を受けることで生まれた小さな興味をきっかけに、先生や先輩、ときには外の世界へ飛び出して、さまざまなものや情報、ひとに触れることで、少しずつ自分の興味が膨らんでいく、就職はそんなものかもしれません。また、大学を卒業して定職に就いたとしても、それは全くゴールではありません。そこからまたさまざまな出会いの中から、自分にとって充実したものを取捨選択していくことになります。そのことを先輩たちは、自分の体験を通して教えてくれたのではないのでしょうか。（大西正紀+田中元子/mosaki）

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>